

第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活② 恐怖と飢え、寒さのシベリア抑留生活②

もりたさたお
森田貞雄さんのお話から

昭和六年（一九三一年）に満州事変という戦争がおこりました。そして、昭和十三年、私が十四歳の時に中国との本格的な日中戦争が始まりました。

そのころ、私は志願をして開拓青年義勇隊に入隊し、満州へ行きました。満州というのは、今の中国の東北地方で、朝鮮の北部です。当時は、日本の領土のようになっていました。満州には、治安の維持と食料増産のため、日本からたくさんの開拓団の人や軍隊、我々開拓義勇隊の少年が何万人と行きました。

二十歳になると徴兵検査があります。私は満州にいたので、そこで徴兵検査を受けました。そして、二十歳の時に義勇隊から軍隊に入りました。

昭和十九年、二十歳の私は、満州国境守備部隊に配属されました。基地が水の無い山の上にあるので、ふもとの宿舎から基地まで、毎日、水を運ばなければなりません。ドラム缶に入れた水を持って山を登るのは大変な作業でした。警備は二十四時間体制で働かなければなりません。ここはソビエト連邦（以下、ソ連）と満州の国境なのです。いつ攻撃されるかわからず、気を抜けないためにとても不安でした。

そして、昭和二十年五月に日本軍が同盟を結んでいたドイツが降伏してからは、八月八日からソ連が軍隊を満州に向けてくるようになり、攻撃が激しくなってきました。

昭和二十年八月十五日、終戦です。日本では戦争が終わりました。満州では、我々のいる高い陣地にソ連の軍隊がやってきて、日本の戦争は終わった、降参したのだと伝えてきました。

○満州 表紙裏地図

○治安 世の中が治まって安らかなこと。社会の望ましい状態を保つための順序やきまりが保たれていること。

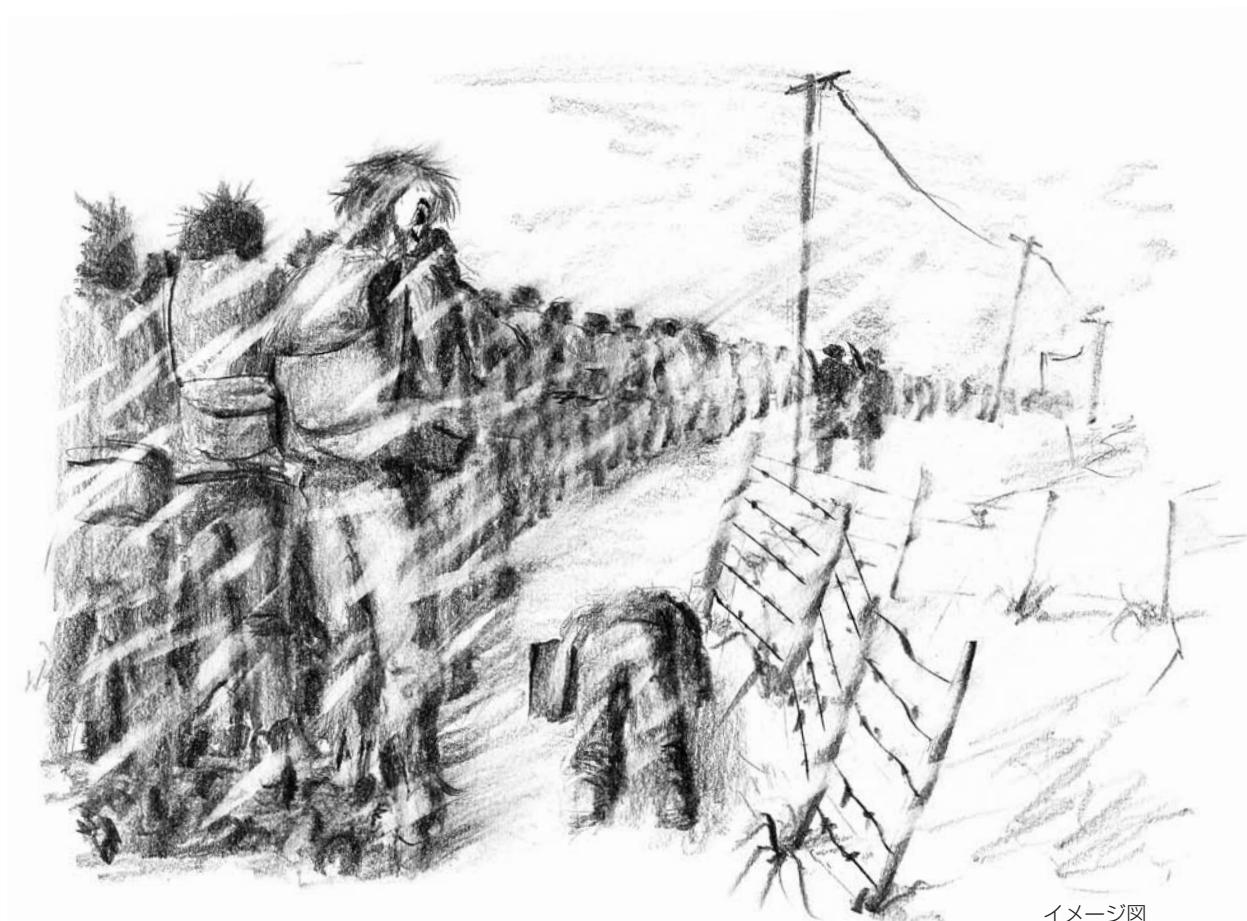
○徴兵検査 兵隊にふさわしい性質や才能などを判定するために身体や身の上を検査すること。

○降伏 戦いに負けたことを認めて、相手に従うこと。

しかし、我々^{われわれ}は山の中にいて、戦争が終わったことを知りません。日本は負けることはない。三回もソ連の上官を帰しました。その後、日本の将校^{しょうこう}が山に来て終戦を告げました。我々^{われわれ}は本当だと確信^{かくしん}して、武装解除^{ぶそうかいじょ}を受けることになりました。大砲^{たいほう}による爆撃^{ばくげき}などで、国境警備^{こっきょうけいび}部隊^{たうたい}の陣地^{じんち}に三千人ぐらいの人が、武装解除^{ぶそうかいじょ}を受けて、出た時には半分の千五百人ぐらいしかいませんでした。みんな亡くなつたのです。

ソ連兵に武器^{ぶき}を捨てさせられ、満州に住んでいる人と一緒^{いっしょ}に集められた時は、ようやく日本に帰れると思つていましたが、何と日本に帰れなかったのです。

恐怖と飢え、寒さのシベリア抑留生活②



イメージ図

歩かされる捕虜^{ほりや}

われわれ
我々がいたのは、牡丹江

というところ。牡丹江

から、朝鮮とソ連と満州

の境の所まで歩かされた

した。それこそ何百里とあ

ります。そして、そこから

汽車に乗せられて、ソ連の

奥地のハバロフスク、ハバ

ロフスクの奥にピロビジャン

ンがあり、そこまで我々は

行きました。そこから奥に

入った人も何万人といまし

た。

ソ連で捕虜に与えられた

仕事は鉄道建設と道路建

設、それから木の伐採です。

我々は収容所のあるピロビジャン

からまた遠い山奥へ行かされ、

木の伐採をさせられたりもしました。

一個駐在で三百名ぐらい入りました。

寒い冬です。シベリアの冬は極寒です。ですが、そこは山ですから、火をたくものがいっぱいあります。そこでの仕事は、ほかで働かされている人たちより本当に恵まれていました。火があつて暖かいのです。鉄道建設や道路建設に入った人たちは寒さでばたばたと亡くなつて

○ハバロフスク 表紙裏

地図

○ピロビジャン 表紙裏

地図

○捕虜 戦争などで敵に
捕らえられた人。



イメージ図

強制労働 木の伐採

○**収容所** 人や物品を入れる場所。特に捕虜などを収容する施設。

いったそうです。シベリアというのはそういう所です。

満州からビロビジャンの収容所まではとても遠く、一か月ぐらい歩かされた時もありました。途中で何人もばたばたと倒れていきましたが、ソ連の兵隊がついているので、助けることもできませんでした。放っておくしかなかったのです。

ビロビジャンの収容所に着いてからは、毎日、寒い収容所で強制労働をさせられました。食べ物は堅くて、小さな真つ黒いパンが一個だけです。それしか与えられない。みんなは栄養失調と寒さで下半身が麻痺し、動けなくなっていました。そんな状態でも病院で診てもらったこともできず、半分ぐらいの人が亡くなってしまいました。私も栄養失調で、どんどんあばら骨が浮き出し、骨と皮だけのような体になりました。しかし、私も栄養失調で、どんどん体は寒さに慣れていたので、何とか生き延びることができたのかもしれない。

日本がソ連に、捕虜にした人を返してくれと交渉して、ソ連はようやく捕虜を日本に少しずつ返し始めました。私は二年ぐらいで日本に帰ることができました。しかし、長い人は十年ぐらいも捕虜で、強制労働させられていたそうです。飢えと寒さのシベリアです。

戦争は、みんなが不幸になってしまいます。絶対にしてはならないのです。何よりも平和が一番です。これから、戦争のない平和の世の中が続くようにみんな協力しましょう。

DATA

平成20年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成20年12月8日
- ・定山溪小学校



森田貞雄(もりた・さだお)さん

- ・大正13年(1924年)生まれ
- ・札幌市南区在住